古墳時代の祭祀遺跡－その廃棄パターン－

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/2836

古墳時代の祭祀遺跡－その廃棄パターン－

桜井秀雄（長野県埋蔵文化財センター）

1．はじめに

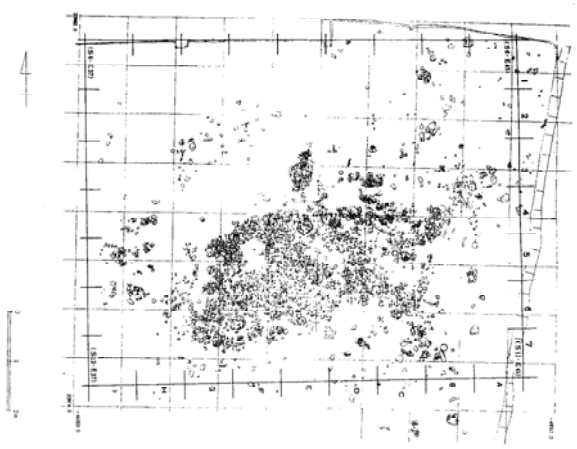
近年、祭祀研究にはより一層の注目が集まっている。新たな知見を与えてくれる祭祀遺跡の発見も相次いでいる。こうしたなか私は近頃、祭祀遺跡の廃棄パターン注目している。そしてここから何かつかめないだろうかと模索している。いまだ成果は出ていないが、今回は現段階での私の試案を提示してみたい。

2．廃棄パターンの分類

まず注意したいのは祭祀遺跡が発見された段階ではあくまでも祭祀行為執行後の姿を示しているということである。今回はこのことを前提として、その廃棄の様相から祭祀遺跡を2類に分類してみた。つまり、A類－祭祀行為後、そのまま放置しているもの。B類－祭祀執行後、片付けているもの。の2類型である。以下、これらについての私見・説明を行いたい。

A類（放置型）

私がこの放置型に注目しはじめたのは、平成8年度に発見された長野県青木下遺跡の土器列が環状にめぐる祭祀遺構を目にしてからである（6世紀後半～7世紀前半頃）。本遺跡では祭祀跡17基が検出された。これらの祭祀跡は4種に分類できる。つまり、土器がブロック状に集中するもの、土器列が弧状に並ぶもの、土器集積が馬蹄形となるもの、そして土器列が環状に配列されたものである。このうち最後にあげた土器の環状配列は、径約8mの環状に約320点の土器が正位に配列されており、祭祀が行われたままの状態で放置されたものと理解できよう。私にとってこの土器列が環状にめぐる祭祀遺構の発見は驚きであり、今まで私が理解していた祭祀遺跡の概念を根底からくつがえすものとなった。私はそれまで祭祀遺跡は福岡県沖ノ島遺跡を除けば、みな祭祀行為執行後には片付けてしまうものと固く信じていたからである。このようにして私は放置型を片付け型とともに祭祀遺跡の廃棄パターンを構成するものとして理解するようになったのである。このような観点から祭祀遺跡を見直してみると先にあげた福岡県沖ノ島遺跡の他、群馬県中筋遺跡の1号祭祀跡も放置型のひとつと考えてよいであろう。



高宮遺跡

『松本市高宮遺跡』1994年より

B類（片付け型）

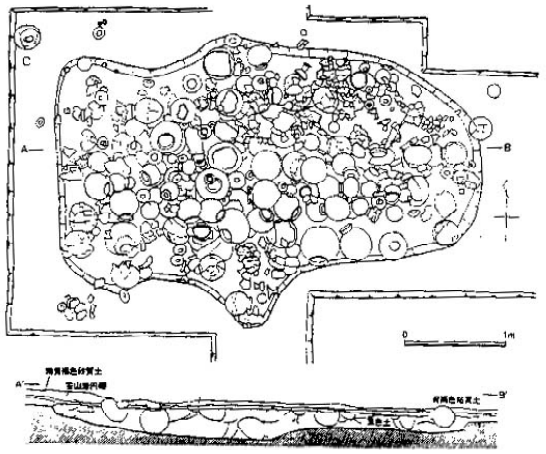
祭祀遺跡の多くは本類型に属するものといえよう。これらはさらに廃棄方法によって細分類することができる。

（１）埋める・・・長野県駒沢新町では5基の祭祀遺構が検出されたが、このうち1号址は4.2×3mの長方形の土坑を約40cm程掘り下げて構築しており、その中からは500個体以上の完形土器と多量の石製模造品が出土している（5世紀中頃）。私は祭祀に用いた道具類を廃棄した痕跡だと理解したい。また同じく長野県石川条里遺跡では幅10～13mの大溝で区画された微高地内には約400基の土坑群が発見されたが、この土坑群の多くは大量の土器・炭化物を含んでおり、祭祀行為終了後の廃棄廃棄土坑と考えられる。炭化物を含んでいることから推測すれば、廃棄に際して「焼く」行為も伴っていた可能性も高い。

（２）破砕する・・・祭祀遺物を（多くの場合は土器であるが）破砕する行為はしばしば見られる現象でる。埼玉県御伊勢原遺跡1号祭祀址では復元不可能な土器片がコンテナ箱約30ケが出土している。

（３）集積する・・・これもしばしば認められる現象である。伊勢神宮では祭祀に用いたかわらけをある一定の場所に次々と積み重ねていることを故亀井正道氏からうかがったことがある。「破砕する」パターンとの区別は難しいと思われるが、あえて分類してみた。

（４）移設する・・・群馬県下芝天神遺跡の器物集積遺構は片付け型にはいるだろうが、前述の分類ではおさまらない特徴をもっている（6世紀初頭頃）。東西10m、南北7mほどの範囲に、膨大な土器・祭祀遺物が出土（土器は実測可能個体で2474点を数えるという）し、それは当時の地表面から最高70cmほどの高さに達している。さて、報告者はこの「土器の山」の土器集積が方形区画が3単位集まったものであることを見いだした。つまり北西の区画は2m×1.5mほどの規模で260個体ほどの土器が集積され、中央の区画は5m×3mの規模で1500個体以上の土器が集積される。東部の一群は調査区外に延びているが確認範囲だけでも600個体以上の土器が集積されている。これらは時間差と推定される。さらに注目されるのは多量の土器は重ねられており、その間には臼玉をはさむものもあることである。私は祭祀行為は別の場所で行われており、その後使用した遺物を「移設」したものと理解したい。「移設」という新たな概念を本遺跡の事例から提唱したい。



駒沢新町遺跡の1号祭祀遺構

『長野県史考古資料編主要遺跡（北・東信）』1982年より

3. 廃棄パターンの意味するもの

このように祭祀遺跡には一様ではない廃棄パターンが認められる。ただし、この差異がいかなる意味を持つのかはいまだ明確な見通しを私はもっていない。祭祀の内容の差なのか、祭祀行為執行者の差異によるものなのか、あるいは時期の差なのか、今後の課題としたい。ただし、青木下遺跡の事例からすれば、祭祀遺構の重複が確認されることから、「祭祀の場の固定化」が認められよう。その「祭祀の場」の規模の大小も廃棄パターンから導きだせるかもしれない。今後はこうした「廃棄パターン」という視点からさらに分析を進めていきたいと思っている。